

第13回「泉大津市オリウム随筆賞」

【オリウム随筆賞（佳作）】

背守りの約束

林 知子・滋賀県大津市

エレベーターを降りた時に、誰かに背中を触られた。その感触にとまどって思わず背に手を回して振り向いた。私について降りてきた初老の婦人の優しい顔がそこにあった。

「あなたの背中そのれ。背守りね。なつかしいわあ」

どこか、遠くを見るような表情だった。

「あつ。ごめんなさいね。停まる寸前に目に入ったもので、つい手が動いてしまつて」

「いえ、そんな」

「子どもが小さい時、母に教えられて背守りを縫つたのよ。三十年も前のこと。こんなところで出会えるなんて。なつかしくてね。それで」

「はい、私の友人作の服なんですよ」

「お友達の。そうなの」

流れるような言葉の余韻に引かれ、人混みを避けるように移動しながら話を続けた。

「その友人、大人の服にも背守りをつけるのですよ。大病で生死をさまよつて。でも、奇跡的に治つたのです。そして、命のありがたさを背守りに込めるつて」

背守りとは、本来は子どもの成長を願う魔よけの模様である。無防備な子どもを背中から守つてやるという意味だそう。首に近い背中部分に刺繍をほどこしたり、端布を合わせで凶案化し、縫い付けたりする。布の配置を工夫して非対称のアクセントをつけたりする。作り手のセンスが光るものである。

彼女の背守りは、古布の模様の部分を切り、それを縫い付け、ステッチの飾りをする人が多い。今日の私の背守りは、二枚の細長い葉っぱが横に広がり、縦には小さい二枚の葉が上下にある。菱形に切つた布が力強い。

「そうなの。快復されたのね。今日偶然に出会つたことで、私も守られそうなの。これに」

「はい。背守りの服を着ると、何だか誰かに応援されているようで元気が出ます」

老婦人は深くうなずくと、もう一度私の背中に回つて背守りをそつとなでた。

そして、私の前に立ち、丁寧にお辞儀をしてから頭を上げた。私の目をくいいるように見つめると言った。

「ね。来年の今日。ここで、またね。また、あなたとあなたの背守りに会いたい」

細く絞り出す声だった。

「えつ。来年つて？」

「あつ。ごめんなさい。約束なんてできないわよね。夢よ、夢よね。お元気で」

去って行く後ろ姿は、肩が落ちてよろけそうだった。

私は、一瞬混乱したが、指先はバックの中の手帳をさぐっていた。末尾にある来年のカレンダーの中から今日の日付を探す。そして、大きく花飾りの丸をうち、横の空欄に『第九演奏会、背守り』と書いた。

そして、一年。新しい手帳には、予告された『第九演奏会』の日に『約束 背守り』と書いていた。その日、公演が終わってからエレベーターの前であの人を待ち続けた。あの時と同じ背守りのコートを羽織ってきた。

ふと背中の方から声をかけられた。

「あのー。すみません。高井と言います」

赤ちゃんを手作りらしい薄い桃色の抱っこ紐で抱っこして、にこやかに微笑む女性が立っていた。赤ちゃんの真っ白い綿の産着の背中には、赤い糸で刺繍された背守りがあった。

「あつ。背守りの約束の方の？」

「良かった、会えて。母があなたに会うことを本当に楽しみにしていたのです」

赤ちゃんのこともあり、近くのカフェに入って話した。

「母は、あの日、演奏会を心の底から感動したと喜んでましてね。そして、背守りにまで出会ったと弾んでいました」

余命を半年と伝えられたけれど、どうしても演奏会に行つたと。帰ってから、産まれてくるこの子のための産着に「背守り」を縫い続けたとの話だった。いくつもの模様を選んで夢中で縫つたと。

高井さんは赤ちゃんのほっぺたをなでて微笑んだ。

「背守りのおかげです。半年と言われていた余命だったのに、三ヶ月もの命を長くもらえました。母は、この子に会えました」

そして、あの日のあの人と同じように食い入るような目で私をじっと見つめると言った。

「もし約束が叶うのなら、今日、あなたに会って欲しいと母は言いました。私も命をいただいたと伝えてと」

さつき聞いた歓喜の歌の大合唱が私の心の中にいつまでも響いていた。